

月刊 響都
July 2023



気を付けてね！ ホールでの過ごし方

- 携帯電話や音が鳴るモノは電源を切りましょう。
- 演奏中はお話ししないで静かに聴きましょう！
周りの人も演奏を楽しみに来ています。
- 録音・録画、写真撮影は禁止です。

2023
7/15

Promenade Concert

プロムナードコンサート No.403

会場：サントリーホール

指揮／アラン・ギルバート

ピアノ／キリル・ゲルシュタイン

♪ニールセン：序曲《ヘリオス》op.17 (約13分)

♪ニールセン：交響曲第5番 op.50 (約34分)

♪ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 二短調 op.30 (約45分)

東京交響楽団

PROGRAM NOTES

今日のコンサートでは、19世紀の終わりから20世紀にかけて活躍した2人の作曲家、デンマークのカール・ニールセン（1865～1931）と、ロシアのセルгей・ラフマニノフ（1873～1943）の作品を聴きます。20世紀には真新しい響きを求める作曲家も多くいましたが、ニールセンやラフマニノフは、伝統的なオーケストラの厚みのある豊かな響きを生かしながら、独自の美しい音楽世界を作り上げました。

ニールセン：序曲《ヘリオス》op.17

遠い昔、ギリシャの人々は、太陽はヘリオスという神の姿だと考えていました。4頭の馬に馬車を引かせ、悠然と空を駆けてゆくヘリオス神。ニールセンの序曲《ヘリオス》は、その美しく立派な様子をイメージさせてくれます。

ニールセンがこの曲を作ったのは1903年です。もちろん彼は古代ギリシャ人のように、太陽は神様だと信じていたわけではありませんが、彼はこの年にギリシャの古都アテネを訪問し、エーゲ海に昇る太陽の美しさに心を揺さぶられ、この曲を作ったのです。またその年には、日光浴が健康に良いと発見した科学者がノーベル賞を受賞したこともあり、人々の太陽に対する関心も高まっていたそうです。

曲は日の出を告げるように、遠くから響くゆったりとした音楽で始まります。やがて爽やかで動きのあるメロディーの掛け合いが起こります。後半は再び落ち着きを見せ、穏やかな日没のように締めくくられます。



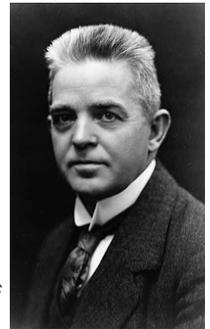
ニールセン：交響曲第5番 op.50

ニールセンは生涯に6つの交響曲を残しています。第2番は「四つの気質」、第3番は「ひろがりの交響曲」、第4番は「不滅」、第6番は「素朴な交響曲」とタイトルが付いています。どれも聴いてみたくなるような題名ばかりですね。しかし彼が最初に作った第1番と、56歳の時に作った第5番にはタイトルがありません。少し取っ付きにくいかな？と感じられるかもしれませんが、その分、私たちはオーケストラの鮮やかな響きの中で、自由にイメージネーションを膨らませることが出来ます。

第5番は1922年1月15日に完成し、1月24日にニールセン自身の指揮により初演されました。曲は2つの楽章で作られています。

第1楽章はさざ波のようなヴィオラの響きを背景に、どこかほのぼのとした伸びやかなメロディーが次々と登場します。やがて小太鼓やトライアングル、ティンパニが加わり、勇ましいリズムとおどけたようなメロディーの行進曲となります。後半は雄大で深みある音楽へとガラリと雰囲気を変えます。

第2楽章の始まりは生き生きと明るい曲想で始まりますが、弦楽器が細やか



に動き、管楽器が緊張感のある和音を奏でる場面もあります。弦楽器が軽快なメロディーや清らかな流れを作り、それがオーケストラ全体へと広がるのも感じられるでしょう。次々と表情が変わっていく立体的な音楽です。

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第3番 二短調 op.30

ピアノ音楽の傑作を残した作曲家の多くは、自分も見事な演奏をするピアニストでした。ラフマニノフも、大きな手をした優れたピアニストでした（身長は2メートル近くもあったそうです！）。また彼は、指揮者としても大活躍をした人ですから、ピアノのこともオーケストラのことも知り尽くしていたと言えます。

ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番は1909年の秋、彼が36歳の時に初めてアメリカへ渡ったときに披露された作品です。祖国ロシアやヨーロッパの国々で活躍していたラフマニノフは、4ヶ月ほど滞在したアメリカでも指揮者・ピアニストとして引っ張りだこで、26回もコンサートに出演しました。人気のピアノ協奏曲第2番とこの新作第3番の演奏も（もちろんピアノはラフマニノフ自身が弾いて）好評を博しました。



曲は3つの楽章で成り立っています。歌心や迫力に富むパッセージを奏でるピアノ独奏と、朗々と響くオーケストラとが語り合うような**第1楽章**、甘く夢見るような音楽が展開する**第2楽章**、舞曲のような華やかさを持つフィナーレの**第3楽章**です。発表当時はラフマニノフ以外にうまく弾きこなせる人はいないのではないかとされていました。その後はテクニックに自信のある多くのピアニストたちから愛され、広く演奏される名曲となりました。

文／飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）

指揮 アラン・ギルバート Alan GILBERT, Conductor



©Peter Hundert

東京都交響楽団首席客演指揮者、NDR エルプフィル（北ドイツ放送交響楽団）首席指揮者、スウェーデン王立歌劇場音楽監督、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団桂冠指揮者。

2017年まで8シーズンにわたってニューヨーク・フィル音楽監督を務め、芸術性を広げる活動が高く評価された。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団など世界の主要オーケストラに定期的に客演している。オペラではメトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座などへ登場。メトロポリタン歌劇場とのDVD『ドクター・アトミック』（Sony Classical）、ルネ・フレミングとのCD『ポエム』（Decca）でグラミー賞を獲得。

ピアノ キリル・ゲルシュタイン Kiril GERSTEIN, Piano



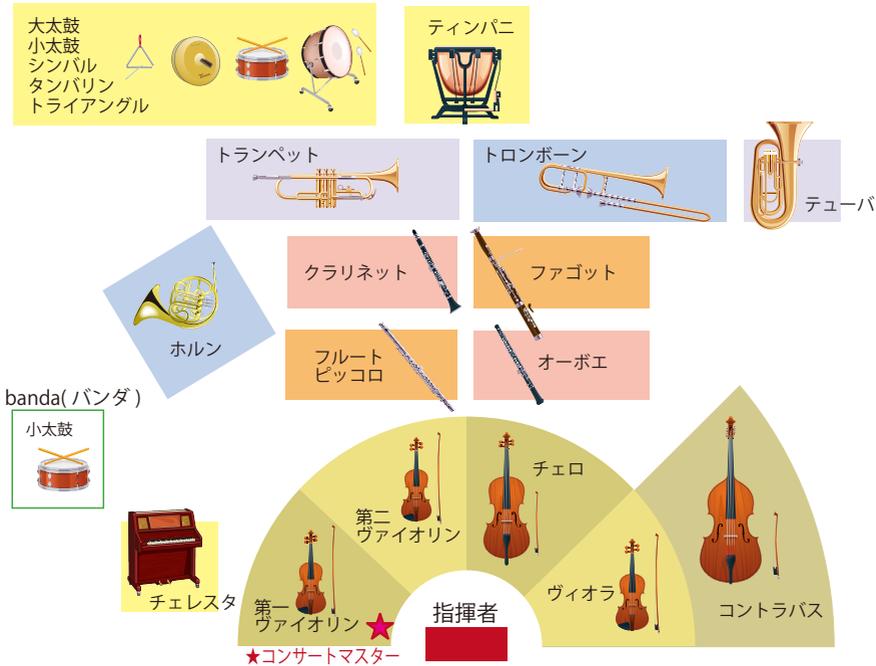
©Marco Borggreve

旧ソ連生まれ、ベルリンを拠点に活動するアメリカ人ピアニスト。ロシアと中央ヨーロッパの伝統にもとづく創造力と飽くなき好奇心をもち、協奏曲、ソロ、室内楽で世界的に活躍している。これまでにウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、ニューヨーク・フィルハーモニック、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団などと共演している。

2020年に発売された『トーマス・アデス：ピアノ協奏曲』（世界初演の録音）はグラモフォン賞を受賞、グラミー賞にもノミネートされた。『ラフマニノフへのオマージュ』を2023年6月にリリース。

オーケストラ配置図（7月15日 プロムナードコンサートNo.403）

演奏する曲によって使わない楽器もあります。
どの曲にどの楽器が使われているかにも注目してみてくださいね。



※楽器の配置は一例です。当日のステージで確認してください。
※バンダはオーケストラの本編成から離れた位置で演奏する別動隊のこと。
舞台上・舞台裏・客席等で演奏します。
ニールセンの交響曲第5番で、小太鼓がバンダ演奏します。

TMSO 東京都交響楽団



©Rikimaru Hotta

東京オリンピックの記念事業として
1965年に東京都が設立しました。
都響（ときょう）という愛称で親しま
れています。

上野の東京文化会館を本拠地として、サントリーホールや東京芸術
劇場などで定期的にオーケストラの演奏会を開催しています。その他、
交響組曲『ドラゴンクエスト』（全シリーズ）や『Fate/Grand Order』など
ゲーム音楽の演奏や、都内の小中学生を対象に開催している音楽鑑賞教室、
病院や福祉施設への出張演奏など多彩な活動に取り組んでいます。

2021年7月に開催された東京2020オリンピック競技大会開会式では、
「オリンピック賛歌」の演奏（大野和士指揮／録音）を務めました。